

論文の要旨

論文題目 日本語母語話者と日本語学習者のあいづちの使用と相違
氏名 古川 智樹
学位 博士（文学）
授与年月日 平成23年 7月 29日

1980年代に入り談話分析の手法が取り入れられると共に聞き手行動の重要性に目を向け、本格的な分析がされてきたあいづち研究は、日本語を中心に分析した研究、外国語との対照研究、接触場面での学習者のあいづち使用に関する研究と様々な研究が行われてきた。以上の研究の成果により、日本語母語話者、日本語学習者、他言語(主に英語、中国語)母語話者が用いるあいづちの機能、頻度、形式などの特徴は明らかにされつつあるが、その研究の大多数は定量的分析によるものであり、あいづちの各形式がどのような機能を持ち、どのような場面で用いられているか、また、日本語学習者は様々な形式を持つあいづちを、適切な場面で適切に使えているかについて、質的分析を行っているものはほとんどなく、さらに、その違いがなぜ起こるのかまで言及した研究は少ない。

そこで、本研究では会話分析と中間言語語用論の分析の枠組みに基づき、聞き手が会話に参加する際に使用するあいづちに焦点を置き、日本語母語話者、日本語学習者、他言語母語話者(中国語母語話者)がどのように言語、非言語によるあいづちを用いてそれぞれ会話に参加しているのかを調べ、その違いがなぜ起こるのか、母語の影響(語用論的転移)、日本語学習者に共通して見られる学習段階による「中間言語的な言語使用」の特性の可能性を考察した。

分析の対象は日本語母語話者(以下 JJ)、中国語母語話者(以下 CC) 同士の母語場面会話、JJ と中国人日本語学習者・韓国人日本語学習者(以下 JC、JK) の接触場面会話の計4場面(各10組)で、各組約30分の初対面の自由会話を録画・録音したものを分析した。

その結果は「あいづちの使用の傾向」、「あいづちの各形式の使用場面と機能」、「JJ と日本語学習者のあいづちの使用の違いとその原因」、「会話の構造に関する日本語母語話者と日本語学習者の知識の相違」の4つにまとめられる。

まず、「あいづちの使用傾向」についてであるが、あいづちの形式、頻度、タイミングにおける JJ、JC、JK、CC の使用数の比較を行った結果、先行研究の結果とほぼ一致した結果が得られ、JJ、JC、JK、CC それぞれの全体的なあいづちの使用の傾向が明らかとなった。具体的には、形式ではいずれの場面でも「ん系/あ系」の使用率が高く、JC では「へ系」が使われていないこと、JK では「え系」の使用率が JJ、JC に比べて高いこと、あいづちの種類では JJ>JK>JC≒CC の順で多いことが明らかになり、あいづちの頻度では JJ≒JK>JC≒CC という順で多く、あいづちのタイミングでは JJ、JC は文中の割合が文末よりも多く、JK は文中/文末の割合がほぼ同じ割合であり、CC は文末の割合の方が多く、JJ は話し手の発話の文中/文末に関わらず、

ポーズと頭の縦振りが同時に話し手側にあった場合にあいづちが多く打たれるのに対して、JK、JC は主に文末にそれらがあった場合に限られていること、CC では話し手のポーズ、頭の縦振りは JJ、JC、JK に比べてあいづちの契機となっていないことがわかった。ただ、個人差はいずれとして存在し、数値による分析ではあいづちの各形式がどのような機能を持ち、どのような場面で用いられているか、日本語学習者が適切な場面で適切にあいづちを使っているかについてまでは明らかにすることができないこともわかった。

次に「あいづちの各形式の使用場面と機能」についてであるが、JJ と日本語学習者の使用に違いが見られた「あ系／そう系／へ系」のあいづちを中心に分析を行った。その結果、まず「あ系」のあいづちについては、あいづちの「あ」は change-of- state token(知識・認識状態の変化の表示)という話し手の発話を受けて、聞き手の知識・認識の状態が変化したことを表す標示であると考えられ、その基本的な機能としては「新情報の獲得／同調」の2つにまとめられた。そして「そう系」のあいづちでは「そうか・そっか／そうなんですか／そうですか」の3つのあいづちを取り上げ、「そうか・そっか／そうなんですか／そうですか」はそれぞれが用いられる場面、連鎖組織は異なり、「そうか・そっか」は「聞き手の心内で整合性が確保され、話し手との認識が一致したことを示す表示」、「そうなんですか」は「会話の流れの中で話し手から与えられた情報が、聞き手の予測と反するものである、あるいは、聞き手の予測・想定範囲外のものであるという表示」、「そうですか」は「話し手の発話を新情報として受け取ったという表示」としてそれぞれ機能しているとまとめることができた。最後に「へ系」のあいづちでは「へ：」が用いられた後の会話の展開に焦点を当てて分析を行い、「へ：」を用いた後の展開ではターンテイキングの起こる場合とターンテイキングが起こらない場合があり、ターンテイキングが起こる場合は「コメント／自発話開始／質問」の3つの展開があり、さらに「質問」については「確認／引用／トピック内／話題変換」の4つの展開があることを明らかにし、「話し手から与えられた新情報を興味・関心のあるもの(価値あるもの)として受け取ったという表示」として機能しているとまとめられた。

次に「JJ と日本語学習者のあいづちの使用の違いとその原因」についてであるが、JJ が用いる「あ系／そう系／へ系」のあいづちの特徴を基に、JJ と日本語学習者の使用の違い、その違いがなぜ起こるのか、日本語学習者(主に JC)の母語の影響の可能性、日本語学習者に共通して見られる学習段階による「中間言語的な言語使用」の特性の可能性を考察した。その結果、まず「あ系」のあいづちに関しては、JC はまだ十分に情報を獲得しておらず、同調しているとも考えられない「傾聴表示」の場面で「あ：」とあいづちを打つことがあり、その場面における「あ」の使用は JC の母語である中国語の「啊[a]」の用法の影響を受けた語用論的転移である可能性が高いこと、次に「そう系+か」のあいづちに関しては「そうか・そっか」の誤用、「そうなんですか」の不使用が日本語学習者に見られ、「そうか・そっか」の誤用については JC は JJ であれば「そうですか／そうなんですか」を用いる「新情報の獲得」の場面で「そうか・そっか」を用いることがあり、その誤用は中国語の「是吗」がいずれの場面でも見られることから母語の影響による誤用の可能性、また JK にも同様の誤用が見られることから学習段階における「中間言語的

な言語使用」の特性の可能性の両方があること、「そうなんですか」の不使用については JJ が「そうなんですか」を用いる場面で、JC、JK ともに「そうなんですか」を使用せず、代わりに「そうか・そっか／そうですか」を用いており、日本語学習者に共通して見られる特徴である可能性が高いこと、そして「へ系」のあいづちに関しては、JK は「へ：」を使用しているものの、「へ：」を用いての会話の展開には JJ と差があり、特に「へ：＋話題変換の質問」の場面では JJ に見られない不自然な展開をさせていること、また、JC は「へ：」を使用しておらず、JJ が「へ：」を用いる場面で CC は「啊[a]／哦[e]」を使用し、JC は「啊[a]／哦[e]」と発音が同じである「あ系／え系」を使用していたことから母語の影響の可能性も考えられたが、一方で JK も「あ系／え系」を使用していたことから学習段階における特徴の可能性もあることがわかった。また、上記の分析をする中で日本語と中国語のあいづちの体系を一部明らかにすることができた。

最後に「会話の構造に関する日本語母語話者と日本語学習者の知識の相違」についてであるが、会話の構造、会話の展開に関するコンペテンス(competence)全体に関して考えるきっかけとして、「あいづち」を中心に JJ と日本語学習者の会話の構造に関する知識の違いについて考察を行った。その結果、その結果、次の 2 点が明らかとなった。まず 1 点目は「JC のあいづちの不使用」である。JJ が発話終了後の TRP(あるいは反応機会場)で JC のあいづちがない、あるいは遅れているとみなした場面で、JJ は JC に対して対処(反応の追求)を行っていたが、そのあいづちの不在・遅れは JC の理解・聞き取り上のトラブルではなく、JC のあいづちを打つ必要がないという意識の影響によって生じている可能性が高いことが明らかとなった。そして、JJ の発話終了後で沈黙が生じているところは JJ にとってはあいづちが期待されるところである一方、JC にとってはあいづちが必ずしも期待される場所(この場面では JC があいづちを打つところ)ではなく、会話の構造に関する知識の違いがあることがわかった。次に 2 点目は「JJ の笑い」である。JJ が JC の笑いに誘発される形で笑った場面で、その場面は JJ にとっては笑いによる反応を行ってもいい場面であったのに対して、JC は冗談などの「面白い話をしている」という意識はなく、なぜ笑われたのかわからないという反応を返しており、JC にとっては JJ の笑いが期待される場面ではなく、「笑い」の反応(あいづち)という会話の構造に関する知識の違いがあることがわかった。

以上の分析で明らかとなった結果は、あいづちの使用、形式、タイミングなどの使用数から日本語のあいづちの特徴、他言語とのあいづちの相違を明らかにしようとするこれまでのあいづち研究に、会話の構造、会話の展開といった視点を取り入れた微視的な分析が必要であることを示したという点で貢献できたと考える。そして、会話分析の手法を用いた日本語学習者の語用論的転移の可能性の提示はあいづちに関してあまり研究が進められていない中間言語語用論の分野に、あいづちに代表されるような会話の構造に関する知識の JJ と日本語母語話者の相違は日本語学習者に内在化する言語システムの解明に、微力ながら貢献できたとと思われる。